

(2) 仏教を信じた人々

古い寺一^{ひ え はい じ}比江廃寺 『日本書紀』によると、684年10月14日の夜土佐の国は大地震^{だい じ しん}がおこり、大きなひ害^{しる(1)}がでて、50万頃（約12 km²）の田畑が海底にしずんでしまったことを、当時の土佐の国司は中央に報告^{はくほう}しています。これが白鳳の大地震といわれるものです。

大化の改新^{たい か かいしん}のころまでの土佐のことはよくわかっていませんが、天武天皇^{てん む}のころには、律令制^{りつりょうせい}にもとづいて国司が中央からはけんされ、政治を行ってきたことがわかります。当時の土佐の国府^{こく ふ(2)}は南国市比江あたりにあったらしく、そのころの様子のおもかげを残す五重^{ご じゅう}の塔の礎石^{そ せき}が、わたしたちに静かに語りかけてくれています。

礎石は、7世紀後半の白鳳時代で、県下最古級といわれる比江廃寺塔跡^{しん そ}の心礎です。現存する心礎は、縦3.24 m、横2.21 mです。この大きな石の中央には直径81 cm、深さ9 cmの中心柱をすえる穴がほられています。さらにその穴の中心に直径15 cm、深さ12 cmの仏舎利^{ぶつしゃり}（仏様の骨などの遺類^{いうるい}）を入れる穴がほられています。

比江廃寺塔跡（南国市比江）

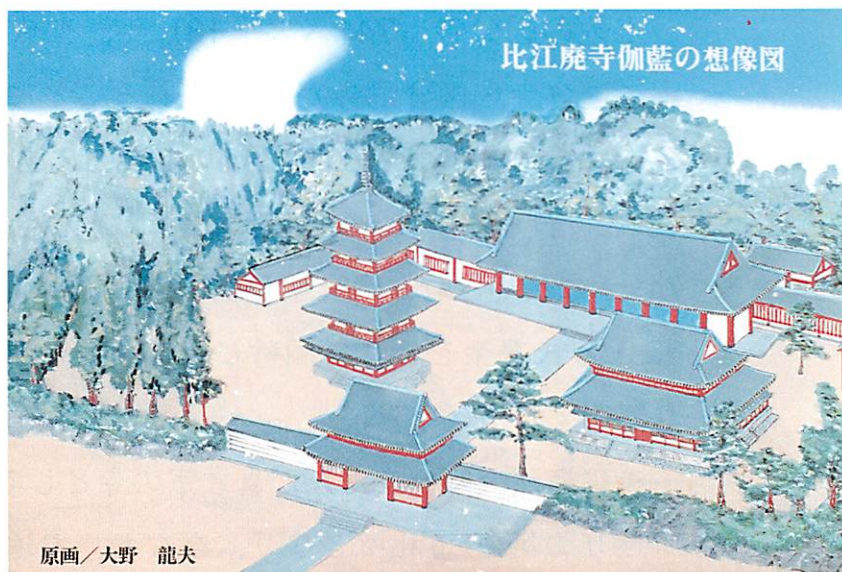
当時には32 m余の五重の塔が建ち、^{こんどう}金堂・講堂・南大門などの大きな建物が^{こんりゅう}建立されていたことが考えられます。

比江廃寺^{ひ え はい じ}の西方に、土佐の国府^{こく ふ}がおかれていました。国府は、^{りつりょう}律令制度のも



とで計画的に設けられた地方都市で、
こくちょう 国庁とよばれる官
ちょう 庁のほか、多くの
 役所の建物がありました。

土佐の国府跡あとからは、これらの役所の一部と見られる建物跡が見つかって



比江廃寺の想像図



土佐国衛附近ホノギ（小字）地図

また、国府跡には
 コクチョウ・コクチ
 ヨウノマエ・ダイ
 リ・フチュウなど、
 国府に関係のあるホ
 ノギ（小字）が残り、
 国司の事務をとる役
 所がこのあたりにあ
 ったことがうかがわ
 れます。

土佐の国分寺 741（天平^{てんぴやう}13）年、聖武^{しょうむ}天皇^{みこと}の詔^{みこと}によって、全国に国分寺・国分尼寺^{にじこんりゆう}が建立されることになりました。土佐の国分寺は、国府跡から西へ1.1kmのところにあります。土佐国分寺は、「土佐で最も良い土地を選んで建てよ。」という天皇の詔^{みこと}によって、741年に創建^{そうけん}され、金光明最勝王経^{こんこうみょうさいしょうおうきやう}が納められ、天下泰平・五穀豊穰^{てんかたいへいごこくほうじやうばんみんほうらく}・万民豊樂^{きがんじよ}を願う祈願所^{こんこうみょうしてんのうごこくじ}として、金光明四天王護国寺ともよばれてきました。

後に弘法大師^{こうぼうだいし}（空海^{くうかい}）が真言宗^{しんごんしゅう}の寺として中興^{ちゅうこう}し、四国八十八か所巡^{めぐ}りの第29番札所^{へんろ}となり、今なお、お遍路^{へんろ}さんの鈴の音は絶えません。鎌倉、室町時代には戦火によって焼失する不運もありましたが、四国^{せい}を制覇^{せい}した長宗我部元親^{はせがき}が金堂を再建し、今日にいたっています。

今、寺域内には、仁王門^{におうもん}・金堂^{こんどう}・大師堂^{だいしどう}などの建物がありますが、創建^{そうけん}当時のものはありません。ただ、国分寺^{けいだい}の境内の東南角より北にかけて作られた当時の土塁^{どるい}の一部が、その姿を残しています。高さ1.5～2m、幅3～4mあります。この土塁によって、国分寺の創建当時の規模は東西500尺（約152m）南北450尺（約136m）以上で、現在の寺域よりもやや大きかったことがわかります。

土佐国分寺仁王門



また、最近の調査により、創建当時の金堂は、今の金堂の真下に埋もれていることなどが明らかとなりました。

天平の昔、国府は土佐の国の好位置をしめ、政治の中心であり、国分寺は文化の中心でした。この地域はおおいに栄えていたことでしょう。今、この地が「土佐のまほろば（すぐれたよいところ）」と呼ばれるゆえんです。

菜の花やれんげの花が咲くころになると、白い服装で杖を持ったお遍路さんが鈴を鳴らしながら、第29番札所国分寺などの行脚をつづける姿がよく見られるようになります。

注(1) 頃 代とも書く。古代の田積の単位。1頃（1代）は、稲1束を得る田積。

(2) 国府 国府は、国におかれた役所のあるところ。国庁は国司の役所で今の県庁にあたる。国衙は、国司の事務をとるところ。

(3) 中興 途中でおとろえていたことを再び盛んにすること。

創建当時の様子を残すもの

土 塁 跡（国分寺東）



塔 心 礎（国分寺境内）

